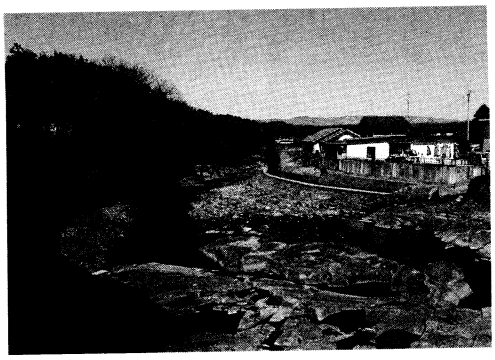
奉納した石碑がある。ここから「台原」を過ぎ「琶琶の頸」を登る。ここに見える「台原」「琵琶の頸」も現地に地名が残っている。そして高瀬川を遡り「黒岩」に憩い、ここで行厨を開いた。ここからさらに「龍塞」と云う所に至り、「一長松の下」で再び酒肴を開いた。さらに「銭花渓」に沿って西へ歩く。この「銭花」は今も銭花の集落があり、風光明媚なところである。この銭花から川に沿って下り石井に出て「石井大明神（石井神社）」の祠に着く。

この時の遊山では、往路、垂水の渡しで三隈川を渡り、帰りは石井神社から三隈川にかかる石井橋を渡り、おそらく日隈神社の前をとおり亀山公園の麓を通って庄手川をわたり、咸宜園に帰ったのであろう。この間、都合三度も渡河している。この時の遊山は、地図上でおよその行程を復元すると、およそ一六キロ、四里の行程である。この間、二度の「行厨」を開いているから、朝、咸宜園を発って帰塾するまで一日がかりの遊山であったと思われる。この行程は風光明媚で知られる日田でも屈指の道行きといえるはずである。その行き帰りには、一行は豆田と隈の町筋を通ったはずである。日田の町人が敬愛してやまない咸宜園の師弟が四十人、列をなして通り過ぎるのである。これを軒端に出て見送る町の人々の姿も目に浮かぶようである。


釜淵

釜淵（図1・43）

高瀬・石井地区には淡窓師弟がよく訪れたところが多いが、そのひとつが高瀬の釜淵―鬼城観音―普門寺をめぐる行程である。

・文政二年（一八一九）

四月朔日。伯父ニ陪シテ隈川ノ南ニ遊フ。館林清記、導ヲナセリ。諸生従行スル者、益多、春育ナリ。外ニ四日市ノ渡辺宗三郎ト云ウ者、同行セリ。是ハ伯父俳譜ノ弟子ナリ。釜淵ヲ看テ鬼城ニ上リ観音庵ニ息ウテ行厨ヲ開ケリ。予、時ニ鬼城ニ題スル詩アリ。曰ク

松瘦石多苔。　梵城何代開。
洞門雲不鎖。　山鬼夜深来。

ソレヨリ普門寺ニ至ル。（略）終ニ上野村ニ至リ古井ヲ見タリ。二ツアリ。（略）護願寺ニ至リ再ヒ行厨ヲ開キ、暮ニ及ンテ帰レリ。

・天保二年（一八三一）

八月二十九日。合原善三郎カ家ヨリ、塾生ヲ饗スルニ因リテ野遊ヲ催セリ。謙吉、塾生三十余人ヲ率ヒテ行ク。予、伸平、成策ト亦同行ス。隈川ヲ渡リ釜淵ニ至リ、鬼城ヲ訪イ、夫ヨリ山ニ登リ、金毘羅ノ祠ニイコヒ行厨ヲ開ケリ。此祠、従来至ラサル所ナリ。境極メテ幽寂。タダ地面狭クシテ多人ヲ容ルニ便ナラツ。予、伸平、大栄、淳ト諸人ニ先ツテ帰レリ。

・天保四年（一八三三）

三月六日。塾生山ニ遊フ。先考。妻。謙吉モ同シク行ケリ。予ハ家ヲ守レリ。晩ニ及ンテ妻帰リ来タリ。先考、鬼城観言庵ニ通夜シ玉フ由ヲ伝ヘタリ。乃人ヲ遣シテ行厨ヲ贈レリ。謙吉及塾生数輩。留ツテ傍ニ侍セリ。七日ニ至ツテ帰宅シ玉ヘリ。

などとあるとおりである。これらの場合も竹田村の垂水渡しで隈川を渡り高瀬川に出る。ここにまず景勝地「釜淵」がある。ここから南にすぐのところ、坂道をのぼると鬼城観音庵である。

釜淵は琴平公民館の裏、高瀬川にかかる鰐淵橋から下流にある。その風景は、江戸時代末期の浮世絵にも描かれている。すなわち二代歌川広重が文久元年（一八六一）に、『諸国名所百景』の一つとして「豊後日田釜淵」と題し描いている。広重は翌年の文久二年三月にも『諸国六十八景』に、同じく「豊後日田釜淵」と題して浮世絵を描いている。森山敬一郎氏によれば、これらの絵は絵師・淵上旭江が、その画集『山水奇観』の「西海奇